

平成30年度病虫害発生予報第2号

平成30年4月18日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
イネ	苗立枯病	—	平年並
	ばか苗病（育苗期）	—	平年並
	イネミズゾウムシ	平年並（中～平坦地） やや遅い（山間地）	平年並
ナシ	黒斑病	やや早い	やや多い
	黒星病	早い	やや多い
	赤星病	早い	平年並
	カメムシ類	やや早い	やや多い
カキ	灰色かび病	やや早い	平年並
	樹幹害虫 （ヒメコスカシバ・フタモンタテメカイガ）	やや早い	やや多い
ブドウ	灰色かび病	やや早い	平年並
	べと病	やや早い	平年並
ネギ	べと病	平年並	平年並
	さび病	平年並	平年並
	ネギハモグリバエ・ネギアザミヤ	平年並	平年並
スイカ	菌核病	平年並	やや多い
	つる枯病	平年並	平年並
スイカ・メロン	アブラムシ類	平年並	やや多い
	ハダニ類	平年並	やや多い

気象予報（抜粋）

1か月予報（4月14日～5月13日：4月12日、広島地方気象台発表）

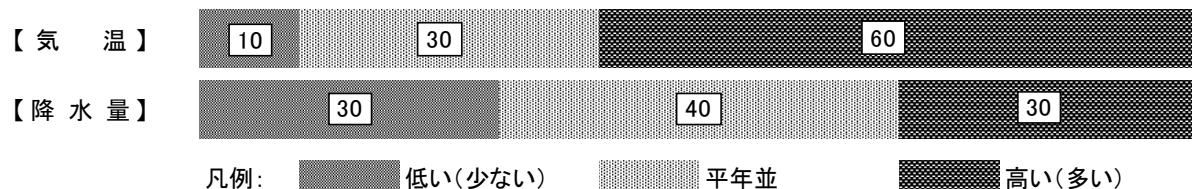
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

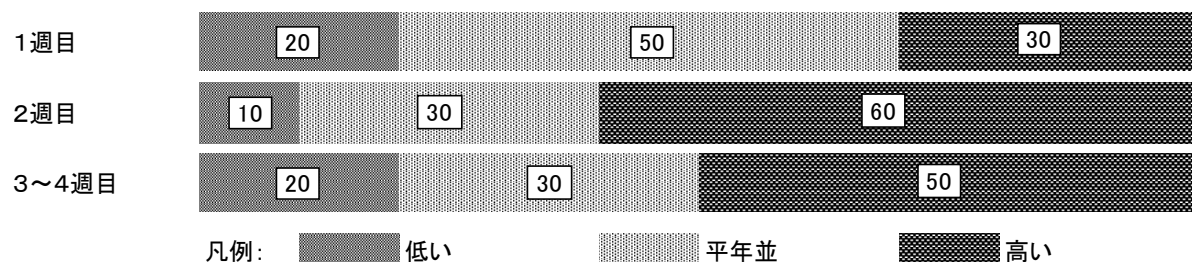
向こう1か月の平均気温は、高い確率60％です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50％です。2週目は、高い確率60％です。3～4週目は、高い確率50％です。

＜向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率（％）＞



＜気温経過の各階級の確率（％）＞



普通作物

[イ ネ]

1 苗立枯病

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 苗立枯病の予防防除が広く普及している。

イ 向こう1か月の気象予報から発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病後の防除は困難であるため、予防防除を徹底する。

イ 育苗環境を清潔に保ち、育苗中の温度管理及び水管理に注意する。

ウ リゾープス属菌による苗立枯病が発生した場合には、発病部分の回復は見込めないが、緑化期(但し、は種14日後まで)までであれば、発見後直ちにダコニール1000(使用回数は2回以内)の500～1,000倍液などをかん注することにより、まん延を防止できる。

エ ムレ苗が発生した場合には、タチガレエースM液剤(育苗箱へのかん注は1回以内)の500～1,000倍液又はタチガレン液剤(育苗箱へのかん注は2回以内、ただしタチガレエースM液剤等のヒドロキシイソキサゾールを含む剤を使用した場合は1回以内)の500～1,000倍液を、1箱当たり0.5リットルかん注し、夜間の保温と昼間の遮光に努め、苗の回復を図る。移植可能であれば、早めに本田に移植する。

2 ばか苗病(育苗期)

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

前年の本病の発生は平年並であったため、本年用種子の保菌率は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 温湯種子消毒については、浸漬時間、温度などを厳守する。消毒後の種子を保管する場合には、種子を十分に乾燥させ、清潔な冷暗所に保管する。浸種時には、必ず水道水を使用し、適宜、水の交換を行う。

イ 薬剤による種子消毒(低濃度長時間浸漬)については、以下のことに十分注意して行う。浸漬処理時の薬液量の不足、あるいは低温時の処理で効果が低下するため、十分な薬液量を確保し、液温は10℃以上を確保する。消毒後の浸種は停滞水中で行い、水の交換は原則として行わないが、水温が高い場合など酸素不足になるおそれがあるときは静かに換水する。なお、薬剤については、病虫害防除指針などを参考にする。

3 イネミズゾウムシ

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平 年 並 (中～平坦地) やや遅い (山間地)
発 生 量	平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 4月13日現在、本種の飛翔に必要な有効温度の積算値は、平年と比べて、中～平坦地でやや少なく、山間地で少ない。さらに、向こう1か月の気象予報から、発生時期は、中～平坦地で平年並、山間地で平年に比べてやや遅くなるものと予想される。

イ 前年の第1世代成虫の予察灯への誘殺数は平年並であった。

(3) 防除上注意すべき事項

育苗箱施用剤の防除効果が高いので、使用時期及び使用量を守り、1箱ずつ丁寧に薬剤を施用する。特に1箱当たりの施用量が不足すると、著しく防除効果が低下するので注意する。なお、薬剤については、病虫害防除指針などを参考にする。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期	やや早い
発 生 量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場における4月第1半旬の孢子飛散量は、平年に比べてやや多かった。

イ 越冬伝染源となる一年枝上の枝病斑数は平年に比べてやや多く、一年枝の病枝率は平年に比べてやや高かった。

ウ ナシの生育は平年に比べて早い。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 小袋掛け終了までの薬剤散布の間隔は5～7日程度とし、特に小袋掛け直前の防除を徹底する。

イ 薬剤はベルクトフロアブルの1, 500倍液、ユニックス顆粒水和剤47の1, 500倍液、有機銅水和剤(キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル)の1, 000倍とポリオキシシンAL水和剤の1, 500倍の混用液などを使用する。

ウ スピードスプレーヤによる防除を実施する園では、往復走行又は縦横走行を行い、散布むらを小さくする。

エ 雌しべ感染を防ぐため、摘果する際はできる限り雌しべを取り除く。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 早 い
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 交配期間の天候が不順であり、初期感染に好適な気象条件であった。
イ 4月第1半旬の分生胞子の飛散量は平年に比べてやや多く、4月第2半旬のそれは平年に比べて多かった。
ウ 越冬伝染源となる芽りん片の病芽率は、平年に比べて高い。
エ ナシの生育は平年に比べて早い。
オ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 感染源となる果そう基部病斑は見つけ次第切除し、園外で処分する。
イ 薬剤は、落花期にスコア顆粒水和剤の4,000倍とチウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）の500倍の混用液などを、摘果期にファンタジスタ顆粒水和剤の4,000倍液、ユニックス顆粒水和剤47の2,000倍液などを散布する。

3 赤星病

(1) 予報の内容

発生時期 早 い
発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場におけるビャクシン上の冬胞子堆形成量はほぼ平年並であり、4月10日現在の冬胞子堆の成熟度は91.5%である。
イ ナシの生育は平年に比べて早い。
ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は早く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤は、落花期にスコア顆粒水和剤の4,000倍とチウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）の500倍の混用液などを散布する。
イ 例年発病の多い園又は初期病斑が多く認められた園では、5月上旬にDMI剤（アンビルフロアブルの1,500倍液、スコア顆粒水和剤の4,000倍液）を追加散布する。

4 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア クサギカメムシの越冬成虫数（ベニヤ板トラップ、県下9地点調査）は、トラップあたり6.4頭（前年：5.6頭）で前年と同程度にやや多いことから、春期の発生量はやや多いと予想される。
イ ナシの生育は平年に比べて早い。
ウ 向こう1か月の気象予報から、春季におけるナシ園への成虫の飛来時期は、平年に比べてやや早い4月下旬～5月上旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 山間地や民家近くのナシ園で、例年発生が認められる園では、幼果期の防除が必要である。
イ 摘果期～小袋掛け期の幼果を加害するので、この時期に果樹園への飛来が認

められた場合、直ちにジノテフラン水溶剤（アルバリン又はスタークル顆粒水溶剤）の2, 0 0 0倍液などを散布する。

[カ キ]

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、本病の発生は認められていない。

イ カキの生育は平年に比べて早い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病原菌は低温・多湿条件を好むため、天候不順が続くと本病が発生しやすい。また、強風などによって若葉が傷ついた場合に突発的に発生しやすい。

イ 西条、伊豆などの品種では、本病の発生が多い傾向である。

ウ 降霜により霜害を受けたほ場では、本病の発生に注意し、防除対策を徹底する。

エ 防除薬剤は、フルピカフロアブルの3, 0 0 0倍液、ゲッター水和剤の

1, 5 0 0倍液、オンリーワンフロアブルの2, 0 0 0倍液などを散布する。

2 樹幹害虫（ヒメコスカシバ、フタモンマダラメイガ）

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 昨年の樹幹害虫の被害はやや多く、越冬密度はやや高いと予想される。

イ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、越冬世代成虫の発生は、平年に比べてやや早い4月中下頃から始まると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除は幼虫の食入防止を目的に、第1世代幼虫の発生時期である4～5月を目安に1回目の薬剤処理を行う。

イ 薬剤はフェニックスフロアブルの2 0 0倍液（使用時期は開花期まで）又はガットサイドSの1. 5 倍液を樹幹害虫の被害が多い部位（樹幹部や枝基部）を中心に処理する。

[ブドウ]

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、本病の発生は認められていない。

イ ブドウの生育は平年に比べてやや早い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 病原菌は低温・多湿条件を好むため、開花期が天候不順になると、本病が発生しやすい。

- イ 薬剤はパスワード顆粒水和剤の1, 500倍液、スイッチ顆粒水和剤の3, 000倍液、ゲッター水和剤の1, 500倍液、ポリベリン水和剤の1, 000倍液、ロブラール水和剤の1, 500倍液又はロブラールくん煙剤の100g/くん煙室容積300～400m³（高さ2m、床面積150～200m²）などを使用する。
- ウ 施設栽培では多湿条件が続くと発病が増加するので、早朝の換気を行って施設内の湿度を下げる。

2 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、本病の発生は認められていない。

イ ブドウの生育は平年に比べてやや早い。

ウ 前年の発生量は平年並であったことから、越冬伝染源量は平年並と予想される。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 開花期以降の天候不順は、本病の発生を助長するので注意する。

イ 薬剤は、落花後（小豆大）にアミスター10フロアブルの1, 000倍液、ストロビードライフフロアブルの2, 000倍液、ベトファイター顆粒水和剤の3, 000倍液などを使用する。

ウ 青ブドウ等の発病しやすい品種、又は本病が例年多い園では、展葉6～8葉期にアリエッティC水和剤の800倍液を追加散布する。

エ 発病果及び発病葉は見つけ次第切除し、園外で処分する。

野 菜

[ネ ギ]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は、15～20℃程度で降雨が続くと急激に発病が増加するが、向こう1か月の気象予報から、発生時期及び発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病後のまん延が早いいため発病前からの防除に努める。

イ ランマンフロアブル2, 000倍液、アリエッティ水和剤800倍液、ペンコゼブフロアブル600倍液、ベネセット水和剤750倍液、ダイナモ顆粒水和剤2, 000倍液などを予防散布する。

ウ 発病を認めたら直ちに、リドミルゴールドMZ1, 000倍液、フォリオゴールド1, 000倍液、レーバスフロアブル2, 000倍液、メジャーフロアブル2, 000倍液、フェスティバルC水和剤1, 000倍液などを散布する。

エ 同一成分を含む薬剤は連用しない。また、成分ごとの総使用回数に注意して薬剤を選定する。

2 さび病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや少ない。

イ 本病の前年秋期の発生量はやや少なかった。

ウ 春期が比較的低温で、降雨が多いと発生量が多くなる。これまでの気象経過及び、向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 被害葉等は伝染源となるのでは場の近くに放置しない。

イ 発病後の散布は効果が劣るため、予防散布に重点をおく。発病前や発病初期には7～10日間隔でマンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤600倍液、ペンコゼブフロアブル500～600倍液など）、ベルクト水和剤2,000倍液、ラリー乳剤4,000倍液、ラリー水和剤2,000倍液、メジャーフロアブル2,000倍液、カリグリーン800倍液などを散布する。

ウ すでに多発しているほ場では、アミスター20フロアブル2,000倍液、ストロビーフロアブル2,000倍液、オンリーワンフロアブル1,000倍液あるいは、オンリーワンフロアブル1,000倍液にカリグリーンを800倍で混用して散布する。

3 ネギハモグリバエ・ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、現地調査ほ場において、ネギハモグリバエ、ネギアザミウマともに発生量はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、両種とも発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗の育苗期後半～定植当日には、ベリマークSC400倍液、ジュリボフロアブル200倍液をセルトレイ又はチェーンポット灌注する。また、定植前日～定植時には、ジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）50倍液又はキックオフ顆粒水和剤100倍液をセルトレイ又はチェーンポット灌注する。苗の定植時には、ジノテフラン粒剤（アルバリン粒剤又はスタークル粒剤）6kg/10aの株元散布又はアクタラ粒剤5の6～9kg/10aの作条混和处理などを行う。

イ 本圃生育中のネギに対しては、アニキ乳剤1,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液などを散布する。

[スイカ]

1 菌核病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

- イ 本病は、15～20℃程度の気温で多湿条件が続くと発病が増加する。向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。
- (3) 防除上注意すべき事項
- ア 하우스やトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。マルチ上にたまった水は適宜、穴を開けて排水する。また、咲き終わった花卉は発病しやすいので、摘み取って除去する。
- イ 薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、カンタスドライフロアブル1,500倍液、セイビアーフロアブル20の1,000倍液、スクレアフロアブル2,000倍液、ロブラール水和剤1,000倍液などを散布する。
- ウ 曇雨天が続く場合は、ハウスではスミレックスくん煙顆粒6g/100m³(床面積50m²×高さ2m)、ロブラールくん煙剤100g/300～400m³(高さ2m、床面積150～200m²)などを使用する。

2 つる枯病

- (1) 予報の内容
- | | |
|------|-----|
| 発生時期 | 平年並 |
| 発生量 | 平年並 |
- (2) 予報の根拠
- ア 4月中旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。
- イ 本病は降雨や過湿で発病が増加する。向こう1か月の気象予報から、発生時期及び発生量は平年並と予想される。
- (3) 防除上注意すべき事項
- ア 하우스やトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。
- イ 本病は株元を中心に発病が始まるので、株元にも薬液が十分かかるように散布を行う。薬剤は、ジマンダイセン水和剤600倍液、アントラコール顆粒水和剤600倍液、ダコニール1000の1,000倍液などを散布する。

[スイカ・メロン]

1 アブラムシ類

- (1) 予報の内容
- | | |
|------|------|
| 発生時期 | 平年並 |
| 発生量 | やや多い |
- (2) 予報の根拠
- ア 4月中旬現在、一部の現地調査ほ場においてアブラムシ類の発生がみられているが発生時期及び発生量は平年並である。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。
- (3) 防除上注意すべき事項
- ア ハウスの換気部分や出入口には防虫ネット被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。
- イ 初発生に注意し、初期防除を徹底する。
- ウ スイカのハウス栽培では、交配前にはチェス顆粒水和剤5,000倍液などのミツバチへの影響のない薬剤を散布する。
- エ スイカのトンネル栽培では、つる引き誘引時期にチェス顆粒水和剤5,000倍液、交配前にモスピラン顆粒水溶剤2,000～4,000倍液などを散布する。
- オ メロンでは、チェス顆粒水和剤5,000倍液、モスピラン顆粒水溶剤8,000倍液などを散布する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期	平 年 並
発 生 量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、現地調査は場においてハダニ類の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ハウスなどで発生初期には、スイカ、メロンともにバロックフロアブル

2,000倍液、ダニサラバフロアブル1,000倍液などを散布する。多発した場合はコロマイト乳剤1,000倍液、マイトコーネフロアブル

1,000倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

< 鳥取県病虫害防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類）などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

< お問い合わせ >

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病虫害防除所

(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※ 予報第3号の発表は、5月16日（水）の予定です。

なお、予定日と実際の発表日が前後することがありますのでご注意ください。